



きらめきの地域デザイン

# 碧い風

あおいかぜ

特集

江戸時代に学ぶ

84

2015 July

特◆集 江戸時代に学ぶ

3 視点 現代における新しい江戸時代像 東京大学史料編纂所教授 山本博文

6 「徳川の平和」と江戸の教育テクノロジー——近代日本の知的基盤——東京学芸大学教授 大石学

10 江戸時代の中国路 作家、江戸文化研究者 石川英輔

14 「地域に生きる企業家群像」⑧ サマンサジャパン株式会社 代表取締役会長 小野英輔（山口県周南市）

18 「キラリ、輝く元気企業」⑤7 「感動」のサービスで顧客を創造する島根電工株式会社（島根県松江市）

20 「夢紡人／ゆめつむぎびと」⑧0 過疎の町で新たな宇宙ビジネスに挑戦する井筒智彦さん（広島県北広島町）

23 「この名酒にこの一品」⑦ 環日本海純米吟醸のど黒 ノドグロ（島根県浜田市）

24 「古地図で読むまち」⑦ 萩（山口県萩市）

26 「新連載」「癒やし湯めぐり紀」① 湯原温泉（岡山県真庭市）

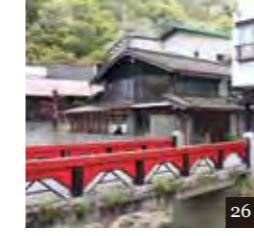
28 「国宝の旅」①9 絹本著色普賢菩薩像（鳥取県智頭町）

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちにしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていって媒体にしていきたいと思います。強くはないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

きらめきの地域デザイン 碧い風 あおいかぜ

84 2015 July

contents



●表紙写真：大日本五道中図屏風 山陽道（三井記念美術館蔵）  
●目次写真提供：国立国会図書館、岡山県観光連盟、宮本 剛、島根電工株式会社、芥川 博之  
●表紙デザイン：久原 大樹（広島市在住）

\*本誌は環境に配慮した用紙を使用しています。

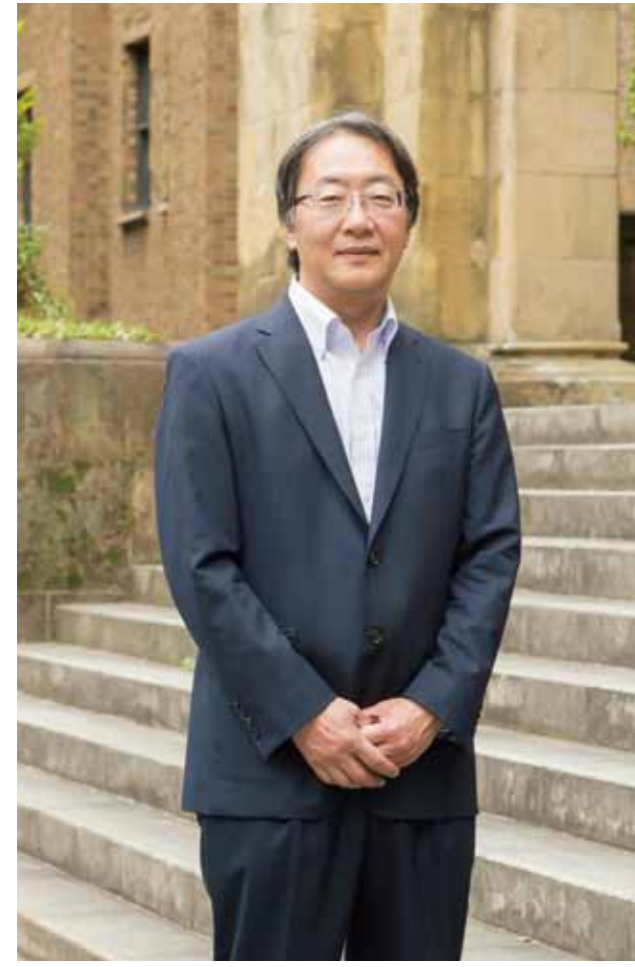
特◆集 江戸時代に学ぶ

視点 現代における新しい江戸時代像

東京大学史料編纂所教授 山本博文

歴史認識の大転換

戦国時代の堺は、自治都市として知られ、イエズス会宣教師のルイス・フロ



ある会合衆（ともがら）によって自治が行われた。この堺を特徴づけるのは、環濠（かんろう）である。町を濠で囲み、周囲の戦国大名の干渉から町を守ったのである。

織田信長が足利義昭を擁して上洛すると、堺や大津の権利を獲得し、堺の会合衆に対して多額の矢銭（やせん）（上納金）を要求した。これに屈した堺は、自治都市としての内実を失うことになる。

かつては、戦国時代から安土桃山時代を経て江戸時代に至る歴史過程は、「天下人」と呼ばれた統一権力による各地の自治の剝奪だつたと考えられ、民衆の自由が失われていく過程として把握された。

中世史家の網野善彦氏は、一般人にまで広く読まれた『無縁・公界・楽』（平凡社、一九七八年）という著書で、日本の中世社会を原始の自由が残る時代として魅力的に描き、そうした「明るい中世」が公権力によって抑圧される「暗い近世」へ移行していくという歴史像を示した。それは、いろいろな規制に抑圧される現代批判ともなっており、こうした歴史像が一般的になった。

しかし、日本の長い歴史を振り返ってみると、環濠によって町や村を守るという時代は、実は弥生時代と戦国時代しかない。弥生時代は、農耕による富の蓄積によって戦いが生まれた時代で

あり、外敵から村を守る必要があった。戦国時代も同様に、個々の町や村が武装しなくてはならない時代だったのである。

弥生時代の環濠集落が消滅したのは、古墳時代となり、日本に大和を中心とした古代国家が成立したからである。戦国時代の環濠集落も、統一政権の成立により消滅した。思想家の尾藤正英氏は、両者の類似に注目し、環濠集落が消滅したのは、統一国家によって平和が保障されたためであつて、「江戸時代の国家体制は、日本史上の古代国家と並ぶ、第二の統一国家」とあると指摘している（『江戸時代とはなにか』岩波書店、一九九二年）。これは、民衆の自由を圧殺した江戸時代という理解から、民衆に平和を保障した江戸時代という理解への歴史認識の大転換だつた。

江戸時代を特徴づける「鎖国」についても、見直しが進んだ。かつては、「鎖国」によって海外から孤立し、世界の進歩から遅れてしまった日本という考え方が主流だったが、現在では「鎖国」が必ずしも国を完全に鎖したわけではなく、長崎では、オランダ、中国と貿易を行い、海外情報も

「鎖国」の見直し



【松平青貴上洛絵巻】 松江歴史館蔵

来日した。中世には独立国家だった琉球は、江戸時代の初めに薩摩藩の支配下に入ったが、対外的には独立国として明・清に朝貢していた。薩摩藩は、琉球を介して明・清と貿易していたのである。蝦夷地（現在の北海道）とは、松平藩が交易していた。

江戸幕府は、日本人の海外渡航を禁じていたし、ここで挙げた国以外の外交や通商は厳禁していたから、確かに体制としては「鎖国」だったのだが、そのことによって、木綿や生糸の生産、綿織物、絹織物の国産化が図られ、それらの製品は幕末には有力な輸出品となり、近代国家の外貨獲得手段として大きな役割を果たすことになる。江戸時代が二百年以上も平和な社会を維持できたのは、この鎖国体制によるところが大きい。オランダ商館の医師として来日したドイツ人ケンペルは、日本が鎖国体制を取っていることは合理的な選択であると、その著書『日本史』に書いている。

### 参勤交代の役割

江戸幕府が諸大名に強制した参勤交代も、従来の理解とは違ってきている。諸大名が国元と江戸を往復するこの制度は、大名の経済力をそぐためと説明されることが多かった。しかし、それは



江戸におけるオランダ人の本宿であった日本橋の長崎屋の情景。窓外に見物人が集まっている。【画本東都遊】3巻（浅草庵作、葛飾北斎画、1802年）国立国会図書館蔵

目的ではなく結果であって、この制度の本質は、諸大名が江戸に参府して將軍に挨拶するという服属儀礼であり、むしろ幕府は大名の行列が華美にならないよう規制していたのである。参勤交代が大名の経済力を奪うというのも、隔年に暮らす江戸での消費のためだった。この制度が、十八世紀初めに江戸を世界でも有数の百万都市に押し上げた。

参勤交代は、日本の文化の交流や経済発展という面でも、重要な役割を果たした。ほとんどの大名が江戸と国元を往復することにより、江戸の文化が地方に波及することになり、参勤の大名行列は各地の街道の整備や宿泊する宿場の繁栄をもたらした。全国の均質な発展という面では、かなり大きな影響を与えていたのである。

### 江戸時代の社会

江戸時代の社会も、かつてのような「貧農史観」は否定されている。年貢率が六公四民、あるいは五公五民といわれるような高率の税だったとされているが、基準となる石高が江戸時代初期の検地によって決められたものだったから、その後の生産力の向上によって農

「金持ちは高ぶらず、貧乏人は卑下しない。……ほんものの平等精神、われわれはみな同じ人間だと心底から信じる心が、社会の隅々まで浸透しているのである」  
欧米の基準で言えば「質素」な生活であったが、みな幸福そうで、しかも少なくとも彼らが目にした日本人は、金持ちも貧乏人も平等だと感じられたのである。

江戸時代の人々の特質にもう一点付け加えるとしたら、「自己犠牲の精神」であろう。これは新渡戸稲造が『武士道』で強調した点でもあった。明治維新が、下級武士が行った制度改革でありながら、武士身分とそれに伴う特権の廃止をもたらすという「革命」的成果を挙げたのは、彼らが日本を守るために命を懸けたからであって、階級的な利害によって行動したのではなかったからである。

### 江戸から受け継ぐ気質

以上見てきたように、現在の江戸時代像は、強大な幕府の圧政下に藩が統御され、さらに幕府と藩の重層的な権力で農民をはじめとする人民が搾取される社会という旧来のイメージから、庶民までを含めた既得権を幕府が認め、それぞれが自発的に社会に対する

江戸時代の職業は、上下関係というより、社会に対する役割の違いと認識され、武士は為政者として、農民は生産者として、商人は流通を担い、職人はそれぞれの技能によって社会に貢献していた。天皇や將軍でさえ、それぞれの地位に伴う役割があった。「禁中並びに公家諸法度」によると、天皇の職分は「学問」であるとされている。これは、純粋な学問ではなく政治や和歌のことを指しており、為政者としてふさわしい教養を身に付けることを要請されていたのである。將軍も、天下万民が平和で豊かな生活を送るために政治を委任されていると認識されていた。幕末、アメリカ使節ペリーが来航して「開国」を要求し、さらにアメリカ総領事ハリスによって「通商条約」を結ぶことになったとき、諸藩に「尊皇攘夷」の動きが活発になったのも、国を守るという職務を將軍が果たしていないと考えられたからである。

### 外国人から見た日本

こうした制度の中で、江戸時代の人々は独自の文明を築き上げた。その特徴は、幕末に日本に来た外国人が、みな一様に日本人を幸福そうだと書いているように示される。例えば、ハリスは、次のように書いている。



シーボルトの専属絵師であった川原慶賀は、長崎の生活や風景を写實的に描いた。【唐蘭館絵巻、蘭船入港図】（川原慶賀筆）長崎歴史文化博物館収蔵

#### profile

山本 博文（やまもと・ひろふみ）  
1957年、岡山県生まれ。東京大学文学部国史学科卒。同大学院修了。文学博士。東京大学史料編纂所教授。専門は日本近世史。1992年、『江戸お留守居役の日記』により第40回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。『お殿様たちの出世』『日曜日の歴史学』『切腹』『東京今昔江戸散歩』『歴史をつかむ技法』『武士道の名著』『東大流 よみなおし日本史講義』など著書多数。NHK・Eテレの『知恵泉』『ラジオ深夜便』などの歴史番組にも出演し、映画やテレビの時代考証も担当している。

# 「徳川の平和」と江戸の教育・テクノロジー

## ―近代日本の知的基盤―

東京学芸大学教授 大石学

歴史上まれなほど、平和が長く続いた江戸時代では、土木産業をはじめとしたテクノロジーが発展し、広く浸透した教育がそれを下支えした。近代日本の知的基盤となった江戸の教育とテクノロジーはどのような広がりがあったのだろうか。



「寺子屋書初」(豊国、西村) 国立国会図書館蔵

## 「平和」と「文明化」の時代

幕末期の慶応元(一八六五)年、世界周遊の途上で来日した、トロイ遺跡の発見で知られるドイツ人のハインリッヒ・シュリーマンは、「この国は『平和』で、総じて満足しており、豊かさに溢れ、極めて堅固な社会秩序があり、世界のいかなる国々よりも進んだ文明国である」(『シュリーマン日本中国旅行記』)と、江戸の「平和」と「文明」を高く評価した。

シュリーマンの言うとおり、江戸時代は、対外戦争や内戦がほとんどない、世界史上でもまれな「平和」な時代であった。江戸幕府(徳川氏)を中心とする長期の「平和」は、「徳川の平和」(Pax Tokugawana)と呼ばれる。

江戸時代は、二度の「世界化」に挟まれた時代であった。第一次は、十五世紀、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリスなどが、キリスト教布教と植民地獲得を目指してアジアに進出し、第二次は、十九世紀、アメリカ、ロシア、イギリス、フランス、プロシアなどが、産業革命や市民革命を経て、資本主義の発展・拡大を目指してアジアに進出したことによる。

江戸時代はこれまで、この二度の「世界化」の間にあつて、外国との通交を以上昇し、江戸の社会は豊かになっていったのである。中国地域では、出雲松江藩が出雲平野や宍道湖沿岸地帯を開発する一方、鉄山の管理を強め、鉄を専売制とし、たたら産産を保護した。

備前岡山藩は、戦国大名宇喜多家が進めていた児島湾沿岸の新田開発を引き継ぎ、延宝七(一六七九)年には、倉田新田、幸島新田、沖新田(以上、現・岡山市)など、大規模な藩営開発を行った。これら新田地帯を中心に、綿や菜種など商品作物を作り、機業や製塩業なども成長した。

因幡鳥取藩領の伯耆では、古代から鉄が生産され、元禄年間(一六八八―一七〇四)には、藩がこれを統制している。また、和紙は因州半紙のブランド名を確立し、貞享三(一六八六)年以後、藩が買い上げ、代わりに米や銀を支払う専売制を採用した。安芸広島藩も、新田開発を進め、量表や鉄の生産奨励、陸海上交通の充実、大坂の蔵屋敷設置などインフラ整備を行った。特に鉄生産は盛



倉吉千歯扱き(上下とも) 写真提供:倉吉博物館

極端に制限し、国家が国民の対外関係を厳しく制限した「鎖国」体制のもと、停滞的・後進的な時代(封建時代)として捉えられてきた。しかし近年、江戸時代の発展的要素が注目され、近代日本を準備した時代(初期近代)として捉えられるようになっていく。この結果、江戸時代は、私たちと断絶した理解不可能な時代から、地続きの理解可能な時代へと、位置づけ直されつつある。

「徳川の平和」のもと、「文明化」が進んだ。この時代、列島社会は自然や神仏が支配する呪術的観念の段階から、人間が自らの力を信じて自然に働きかける合理的・客観的観念の段階へと離陸したのである。戦国時代から江戸前期にかけて列島の大開発が行われ、耕地は三倍、人口は二・五倍に増加した。文字や教育が普及し、神仏に頼る紛争解決の手段である湯起請(熱湯中の石を手でつかみ火傷により正否を決める裁許法)や鉄火(熱した鉄を握らせる裁許法)などの神裁法が禁止され、法律と証拠をもとに幕府(公儀)が裁決する合理的・文明的な解決方法が普及した。

このような「平和」と「文明化」の新たな土壌の上に、江戸の科学技術が花開いたのである。先のシュリーマンは、

諸外国語が学ばれ、軍事や医学を中心に洋学が発達した後期十九世紀、に大別される。

### 1 前期(十七世紀)

前期十七世紀の生産力発展を支えたのは、農業を中心とする諸産業技術の進化であった。例えば、開削技術の進歩により溜池や用水路などが整備され、築堤技術の発達により大河川流域や海岸部に大規模新田が造成されたが、これらは、戦国時代の築城・鉱山技術が転用されたものであった。

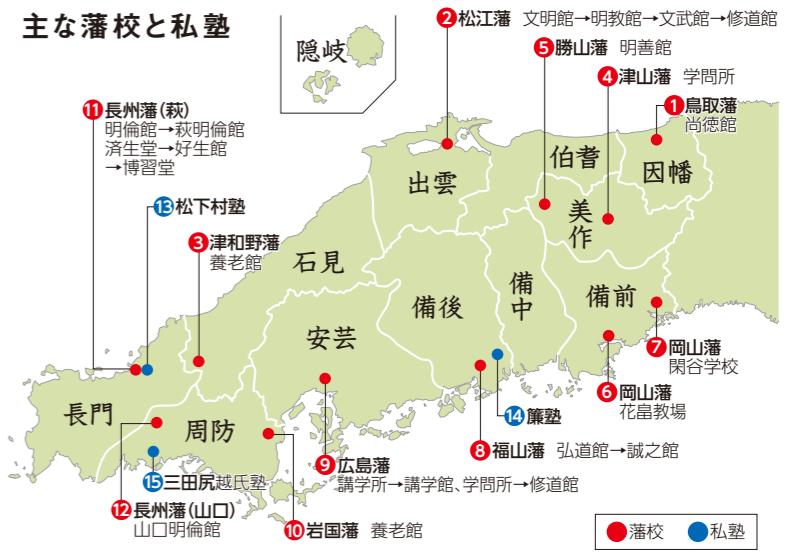
しかし、列島大開発は、森林の枯渇や洪水の発生などの環境破壊を招き、農業は一六五〇年ごろを境に、耕地拡大主義から単位面積あたりの収穫量の増加を目指す精農主義へ転換した。深耕用の備中鉞や脱穀用の千歯扱きなどの農具が発明され、新たな農業技術や知識を普及させるために、宮崎安貞の『農業全書』などさまざまな農書が刊行された。

鉱山技術も、採掘、排水、精錬などの改良が進み、佐渡の金銀、生野・大森の銀、足尾・別子の銅など、鉱山が開かれ、日本は世界有数の産出国となった。鉄は、中国地域を中心にした精錬が普及し、農具や工具の製作に用いられた。

「もし人がいうように文明を物質文明として理解するならば、日本人は非常に文明化された民族だといえよう。なぜならば産業技術において、彼らは蒸気機関の助けもなく達せられうるかぎりの非常に高度な完成度を示してきているからである」(同前)と、江戸テクノロジーの水準を絶賛している。「鎖国」体制のもとで、江戸文明は決して停滞していただけはなかった。人々は外国からの限られた知識や情報をもとに、確実に社会を豊かにしていたのである。「平和」な社会は、為政者の力のみで達成されるものではなかった。「国民」の広い理解と合意が必要であり、それを育てたのが、「江戸の教育力」であった。「徳川の平和」は、「江戸の教育力」と表裏だったのである。

## 江戸のテクノロジーと教育

江戸テクノロジーの発展は、①三代将軍家光の時代に確立した「鎖国」体制のもとで、土木産業テクノロジーが発達し、飛躍的に生産力が伸びた前期十七世紀、②八代将軍吉宗の享保改革(一七一六―四五)によりオランダ語や蘭学を通じて、西洋の知識や技術が導入され普及した中期十八世紀、③ロシアをはじめとする西洋諸国の日本接近のもとで、オランダ語以外のさまざまな



指した。また、寛文八年には、「百姓小年の者学文(問)すべき所」として、藩領各地百二十三方所の手習所を設置した。その後、財政難などから削減され、寛文十年、最終的に閑谷学校に統合された。寛文十二年ごろ藩の学問所として運営されるようになり、元禄年間に諸施設が完成した。十八世紀後半には、地域の上層農民の子弟の教育機関の郷校として発展し、幕末期には他藩からの入学者も多かった。藩校と同じく正統派の朱子学を学び、課外には教授の屋敷などで、会説、研

## 2 中期(十八世紀)

中期十八世紀は、前期の技術・経済の発展に加え、吉宗の享保改革により西洋の知識・技術が輸入され、普及した時期である。吉宗は、漢訳洋書の輸入制限を緩め、青木昆陽や野呂元丈らにオランダ語を学ばせた。これが端緒となり、実用の学である蘭学が、天文学、暦学、地理学、医学、博物学などの分野で発達した。昆陽にオランダ

究が行われた。幕末期、ここを訪れた儒学者の肥後藩士横井小楠は、「江戸聖堂之外は、天下に如此壯麗之学校は御座あるまじく存ぜられ候」と、江戸の幕府学問所の湯島聖堂に匹敵すると高く評価した。学校の名声は、全国に及び、江戸後期には、高山彦九郎(尊王論者)、頼山陽(儒学者)、大塩平八郎(儒学者、大坂町奉行所与力)らが見学に訪れ、幕末期には大鳥圭介(蘭学者のち幕臣)、西周(津和野藩医の子のち幕臣)らも来学している。閑谷学校は、聖廟、講堂、学舎などが現存し、本年日本遺産に認定された。

語を学んだ前野良沢(中津藩医)や、杉田玄白(小浜藩医)らが、『ターヘル・アナトミア』を翻訳し、『解体新書』を刊行したのは、その象徴である。これら蘭学発達の背景には、江戸時代の人の合理主義・実証主義的な見方、考え方の深まりがあったのである。

この時期、広島藩の五代藩主浅野吉長は、朱子学者室鳩巢から「当代の賢侯第一」と評価された人物であり、享保十(一七二五)年、内白鳥(現・広島市中区)に諸芸稽古場を創設し、場内に漢学教場として講学所を設立した。これが広島藩藩校の始まりである。同十九年講学館と改称し、一時閉鎖したものの、天明二(一七八二)年七代藩主重晟が城内二の丸に再開し、講積の聴聞は庶民にも許可した。

元(一八六五)年には修道館と改称した。長州藩では、享保四(一七一九)年五代藩主毛利吉元が藩士の文武振興のために、城内三の丸に藩校明倫館を設立した。

## 3 後期(十九世紀)

後期十九世紀は列強の接近とともに、ロシア語、英語、フランス語、ドイツ語などが学ばれ、軍事や医学を中心に蘭学が「洋学」へと展開した。武士たちは、幕府や藩の違いを超えて交流し、庶民も洋学を学ぶなど、洋学は、地域や身分を超えて普及していった。

鳥取藩の藩校尚徳館では、国学・兵学などが新科目として採用された。

鳥取藩の五代藩主池田重寛は、宝暦六(一七五六)年に藩校を開設し、尚徳館と名付けた。最初は上級武士に限られたが、のち下級武士にも開かれた。松江藩では、宝暦八年に城下に藩校文明館を開設、天明四(一七八四)年に明教館と改称、のち藩政改革を主導した「名君」として知られる七代藩主松平治郷(不昧)のとき、漢方医学を学ぶ存濟館、兵学を学ぶ大亭館が設立された。幕末期には、さまざまな教場を統合し、文武館と名付け、慶応

長州藩では、十三代藩主毛利敬親が藩政改革の一環として、文教政策を展開し、明倫館を移転新築した。新明倫館は、聖廟、演武場、講堂、水練場、馬場、練兵場などを設け、科目は、経学、歴史、制度、兵学、博学、文

学の六科目とした。学頭まがたまの山県大華は、学風を徂徠学から朱子学に改めるとともに、防長両国の諸学館・郷校にも朱子学を導入させ、学統の統一を図った。医学教育を行う済生堂は、嘉永三(一八五〇)年に好生館と改称し、安政二(一八五五)年には好生館の中に西洋学所を開設、同六年に独立して兵学研究機関の博習堂と改称した。文久元(一八六一)年五月藩主敬親は、山口講習堂を移転拡充して、同三年山口明倫館と改称し、山口と萩の明倫館は、多くの優秀な人材を輩出した。萩城下の私塾松下村塾は、天保十三(一八四二)年、吉田松陰が、叔父玉木文之進の家塾の名称を受け継ぎ開き、高杉晋作や久坂玄瑞らを輩出し、長州尊攘・討幕派の拠点となった。

以上、江戸時代は長い「平和」のもとで、独自の文明が国民の間に浸透し、

た時代であった。冒頭のシュリーマンは、いわばその最後の姿を見たのである。二度の「世界化」の間にあつて、日本社会は確実に近代化・文明化の道をたどってきたのである。



松下村塾  
[参考文献]  
大石学編『近世藩制・藩校大事典』(吉川弘文館、2006年)  
大石学『江戸の教育力—近代日本の知的基盤—』(東京学芸大学出版会、2007年)  
大石学監修『図説 江戸の科学力』(学研パブリッシング、2009年)

この時期、諸藩は財政再建に向けて、収入増加のために藩専売制を積極的に実施した。岡山藩では、文政九(一八



閑谷学校講堂 写真提供:岡山県観光連盟

明治維新後の日本の近代化は、決して江戸の科学技術を否定し、捨て去るものではなかった。今日、世界が注目する日本型経営やシステム、中小企業の精密技術や職人気質などは、むしろ江戸の社会システムや科学技術、集団の規範・精神などをもとに発達してきたものであった。

profile  
大石 学(おおいしまなぶ)  
1953年、東京都生まれ。東京学芸大学卒業、同大学院修了、筑波大学大学院博士課程単位取得。東京学芸大学教授。専門は日本近世史。著書に『享保改革の地域政策』『近世日本の統治と改革』『人物叢書・大岡忠相』『時代劇の見方・楽しみ方』『新しい江戸時代が見えてくる』(いずれも吉川弘文館)『日本史リブレット人・徳川吉宗』(山川出版社)ほか。大河ドラマ『新選組!』『篤姫』『龍馬伝』『八重の桜』『花燃ゆ』ほかの時代考証を担当。時代考証学会会長。

# 江戸時代の中国路

作家、江戸文化研究者 石川英輔

日向国の山伏、泉光院が全国を旅して書き記した『日本九峰修行日記』には、その土地で出会った人々の様子や、地域の文化や習慣がつぶさに描かれている。江戸時代の中国地域の暮らしは泉光院の目にどう映ったのだろうか。



山口近郊の農村風景 「紙本着色「四季耕作図」笹山養意筆」 山口県文書館蔵

九峰修行日記』を書き残したため、江戸時代の日本全国各地の様子をかなり詳しく後世に伝えることができた。この日記は四百字詰め原稿用紙約千枚相当という自筆原稿の全文が現存しているが、原文は簡潔な文語文のため、現代語で書けば数倍の長さになるだろう。宗教者としても武家としても高い教養を身につけていた泉光院が、自分の見聞きしたことを分かりやすい言葉で書き残してくれたおかげで、二百年後のわれわれも旅の経験を筆者と共有できるのだ。

泉光院が、九州一周を終えて門司から下関に渡ったのは文化十年十一月一日（グレゴリオ暦一八一三年十一月二十四日）で、翌文化十一年六月三日（グレゴリオ暦一八一四年七月十九日）に因幡国（現・鳥取県）から但馬国（現・兵庫県北部）に入った。往きに中国地域を旅した期間は約七カ月半で、九州への帰り路では、文政元年八月一日（グレゴリオ暦一八一八年九月一日）に美作国（現・岡山県北東部）に入り、一カ月半後の九月十六日（グレゴリオ暦十月十五日）に尾道から船で四国に渡った。

## 野田泉光院の旅

文化九年九月三日（グレゴリオ暦一八一二年十月八日）の早朝、泉光院野田成亮（しんせつ）という一人の老山伏が日向国佐土原（現・宮崎市佐土原）を旅立した。目的は日本全国の托鉢行脚、足にまかせて日本中を歩きまわって各地の寺院、神社に参詣することだったが、彼の旅が平凡な旅行者と違っていたのは、『日本九峰修行日記』と題する詳しい日記を毎日書き続けた点である。この日記には、中国地域についても詳しく書いてあって、江戸時代の最盛期だった文化文政時代の様子も分かるが、その前に、泉光院という人物の経歴と、山伏という職業について簡単に触れておくことにしよう。

泉光院は、この当時としてはすでに老齢の満五十六歳だった。旅立ちの前年に隠居していたが長旅に耐えられるほど頑健だったため、かねてより願っていた全国托鉢の旅に出ることにしたのだった。南九州から現在の秋田県北部までを歩いた泉光院が故郷佐土原へ戻ってきたのは、六年二カ月後（文政元年十一月七日・グレゴリオ暦一八一八年十二月八日）だった。

彼が歩いた距離を正確に測ることはできないが、地図上でごく大まかに推定すると約九カ月も滞在したことになる。合計で約九カ月も滞在したことになる。

## 托鉢の旅

泉光院の托鉢の旅とは、いったいどのような旅行だったのだろうか。托鉢とは、家々の軒先に立って食べ物や金銭を鉢に受けながら巡り歩く仏教の大切な修行である。泉光院の記録では、大きな町以外ではまず旅籠（はたご）に泊まっている。旅籠とは現代の日本式旅館の前身で一泊二食付きで泊まれるが、それなりの宿泊費を払う必要がある。木賃宿（きざしゆく）は、米は宿泊者持ちの宿で、旅籠の半値以下で泊まれるが、この日記で見ると限りでは「安かろう悪かろう」の傾向があつて、泉光院は割高に感じることが多かったようだ。

だが、泉光院は、主に農山村を巡ったから、大部分は普通の農家や商家に泊めてもらった。当時の農民に旅人を

測したところでは少なくとも二万キロに達するだろう。ざっと地球半周分だ。渡し船以外に公共交通機関のない時代だから、旅はすべて徒歩が基本で、この長旅の間、高齢の泉光院は、時には一日に六十キロもの山道を歩き通したのである。

山伏は修験者（しゆげんじや）ともいって、もともとは靈力を得るために山の中で苦行をする修行者だったが、江戸時代には天台宗や真言宗などに組み込まれていた。泉光院は当山派つまり真言宗の僧侶でもあり、佐土原にあった安宮寺（あみやうじ）という修験寺院（山伏寺）の世襲住職であり、山伏最高位の大先達（だいせんだち）の地位にあった。厳しい訓練で鍛え上げた行者でもあったのだ。

当時の佐土原は、島津家二万七千七十石の大領だったが、泉光院は、佐土原島津家の血縁者であり、先祖が主君の命令で戦没者の慰霊のために山伏になった家柄で、藩から二十七石の禄を受けている武士身分でもあった。泉光院は僧侶としての院号で、野田成亮は武家としての名前なのだ。

## 泉光院と中国地域

一人の老山伏がいくら長旅をしたところで、それだけでは何も残らないが、泉光院は地道な旅を続けながら『日本泊める余裕があつたのかと不思議に思う人が多いそうで、私自身この日記を読むまではそんなふうには思っていたが、戦争で巨費を投じることがなかった時代の庶民は余裕があつたらしく、泉光院はただの一度も野宿をしていない。「旅人を泊めてはならない」というお達しの出ている村であっても内緒で泊めてくれる人がいるのが普通だった。よほど厳しい土地でも、旅人が勝手に泊まれる（辻堂）とか（庵）などというちょっとした無料の宿泊施設があり、炊事は地元の人が行ってくれることもある。見ず知らずの他国の人を泊めるのは迷惑でもあるが、娯楽や情報の少なかった時代は、旅人の話を聞くのを楽しむ人も多かった。

特に泉光院のような修行を積んだ老山伏は、頼まれれば本式の占いをしたり、加持（かじ）つまり病人に特殊な祈禱（きとう）をす



托鉢行脚する僧



泉光院の肖像

することも期待されていた。また、学問好きな人の多い土地では地元の有学者の頼みで「論語」「大学」「孝経」などの儒学の講義をすることもあった。弓の師範でもあった泉光院は、あちこちで弓術を教えた。向学心の強い人の多かった中国地域では、この種の「授業」のための滞在もかなり多かった。教師をする場合は、ただ泊めてもらうだけでなく、ご馳走になったり饂飩の品をもらったりしている。

また、「年宿」といって、気の合った家で、旅人を年末から正月にかけて滞在させる風習は各地にあった。泉光院も南は長崎から北は甲州の山の中まで五カ所で年宿の提供を受けている。中国地域では、天田村（現・山口市秋穂町天田）の八郎右衛門という親切な人の家で、十二月二十二日から正月十三日までのかな正月を過ごした。

もちろん、楽しいことばかりではなく、例えば中国地域の法華宗や門徒宗の村では一切托鉢にに応じてもらえず、辛い旅をしている。しかし、全体としてはのどかな旅だったから、六年以上もの間、故郷を遠く離れて暮らせたのだらう。

## 泉光院の見た中国地域

ここまで泉光院の托鉢の旅のうち全

詣した泉光院は、松崎（同町松崎）で泊まろうとしたが、この旅籠に泊まるとバクチを勧められるというので「風俗よろしからず」。そこで、一般民家に泊まろうとしたが、住民はとても親切なので、日記には「いたって善心なる所なり」とも書いた。江戸時代は全国的にバクチが禁止されていたはずなので聞



江戸後期の広島城下の町並み(現在の広島市南区京橋町付近)『広島城下絵屏風』 広島城蔵

国共通のことを書いたが、彼は中国地域に入ってからほかの土地で経験しなかった珍しいことをいくつか書いている。

### 1 長州の社会保障

長州（現・山口県）に入った泉光院は、萩城下の書物屋で専門的な書物を買った。お城を見てから南下したが、閏十一月七日（グレゴリオ暦十二月二十九日）に笹波（現・萩市佐々並）で、その年の五月にあった興味深い話を聞いて記録した。

肥前天草からの五人連れの女性たちが、四国巡礼の帰りに笹波に泊まったが、一人が天然痘にかかってしまった。それを見た宿の主人は萩城下へ飛脚を出してお上に相談すると、治つてから帰国させよとお達しで、御典医が派



山口県萩市佐々並



伯耆一の宮 倭文神社 写真提供:湯梨浜町観光協会

遣されてきたばかりか、病人に一日一人一升の米を治療費として支給し、介抱人を二人つけてその手当として銭六貫（約金一兩）を支払ってくれた。もう一人が感染して二人亡くなったが、藩は生き残った三人に一人の者をつけて天草まで送った、というのである。

江戸時代の日本人には旅行の自由がなかったと書く人もいるが、この天草の女性たちは四国一周をしてすぐに帰らず、回り道をして長州を歩いている。自由気ままに歩いているとしか思えない。また、長州の藩政府は、他国の旅行者に、現代のわれわれでもびっくりする

粒のように小さいのに一個一文もする」と憤慨している。彼が比較するのはこれまで二年間歩いてきた素朴な農村社会だから、この当時すでに「日本三景」の一つとして全国的に有名だった宮島の泉光院ぶりにはついていけなかったのだらう。

### 4 広島県の宗教論争

安芸国（現・広島県西部）は浄土真宗の信者（門徒）が多い土地である。これも泉光院が聞いた話だが、文化十（二八一三）年に神道者が広島島の門徒の集まりに顔を出して、門徒の信仰を徹底批判しはじめた。ところが、わざわざ論争を仕掛けるだけあってかなりの論客であり、門徒側はなかなか論破



『諸国名所百景 安芸宮島汐干』(広重) 国立国会図書館蔵

### 泉光院の旅(中国地域)

往路(文化10年11月1日下関~文化11年6月3日但馬国)  
復路(文政元年8月1日美作国~9月16日尾道)



るほど手厚い扱いをした。泉光院も「旅人ははなはだ大切なるお扱い」と感動して書いている。

### 2 バクチ公認の松崎

文化十一（二八一四）年五月、伯耆一の宮（倭文神社 湯梨浜町）に参

できない。ついに藩の寺社奉行の前で裁いてもらうことになった。広島県の領主浅野家は禅宗なので、奉行は客観的に裁いたが、弁舌さわやかな神道者に反論できなかった門徒僧二人が罰せられたそう。その理由は「負けた広島側が恥をかいた」せいらしい。

泉光院は珍しい伝聞や経験として書いたはずだが、私の感想は、古くからの文化があった中国地域は、すでに「先進地域」になりかけていたということだ。泉光院の日記では、日本中にこれほど「現代風」なことをする土地は出てこない。素朴な生活に慣れ親しんでいた泉光院にとっては違和感があったのだと思う。

### 3 大観光地の厳島

安芸の宮島、厳島神社は当時としても大変有名だったので泉光院はかなり期待して参詣したが、「絵図と大いに相違し、いたって狭き所なり」と書いている。大袈裟な絵図の方に責任があると思うが、泉光院はがっかりしたらしい。また「茶屋で売っている餅が豆

【参考資料】  
石川英輔『泉光院江戸旅日記』(ちくま学芸文庫、2014年)

#### profile

石川 英輔(いしかわえいすけ)  
1933年京都市生まれ。東京都立石神井高校卒。国際基督教大学、東京都立大学を中退。ミカ製版株式会社取締役を経て、85年より専業作家に。『大江戸神仙伝』『大江戸えねるぎー事情』『大江戸リサイクル事情』(すべて講談社文庫)など著作多数。





サマンサジャパン株式会社 代表取締役会長 小野 英輔 《山口県周南市》

# 心に技術が伴って、「経営」になる

## 真のお客さまは誰か

朝八時五十分。病院の通路で恒例の朝礼が始まった。

「朝礼を始めます。笑顔の準備はいいですか」

「ハイ！」

「よろしくお願いします」  
この病院の清掃などの業務を担う「サマンサクラブ」のメンバーだ。パステル調の爽やかな色のユニフォームに身を包み、白いシューズ、色鮮やかなバンダナを合わせたヤングミセスたちが整然と並ぶ。

「挨拶チェックを行います」  
リーダーの言葉に続き、メンバーたちが復唱し、体を動かしていく。

「十五度挨拶」

「お疲れさまです」

「おはようございます」

「こんにちは」

「ありがとうございます」  
「四十五度挨拶」  
「申し訳ございません」  
相手の目を見て言葉を丁寧にかけて、背筋を伸ばし、腰を折る。角度も状況に応じて変えている。

企業理念、行動四原則の唱和に続き、二人一組になって身だしなみをチェックする。ユニフォームは汚れていないか、爪は

伸びていないかなど、丁寧に点検していく。最後は連絡事項を確認し合い、リーダーが朝礼を締めくくる。

「これで朝礼を終わります。今日も一日、笑顔をお届けしましょう」

名物になってきているこの朝礼を、医師や職員は通り過ぎながら笑顔で眺め、患者や家族は感心しながら見つめている。

もちろん、挨拶や身だしなみは、サマンサクラブの女性たちの気配りの一部ではない。本来の業務である清掃作業では、大きな病院のあらゆる清掃を受け持ち、きめ細かく定められた方法で清掃を進めていく。

移動の際は、さりげなく挨拶し、道を聞かれたら、行き方を笑顔で伝える。この空間を快適に使うという思いが伝わってくるのがサマンサクラブのサービスだ。その裏には、掃除はお客さまの『繁栄お手伝い業』だという考えがある。

「私どものお客さまは二通りいらっしゃいます。一方は、病院を経営する側。もう一方は、病院を利用する人です。後者の方々が私どもの真のお客さま。病気で苦しむ心に寄り添う気持ちで、お客さまへのサービスを考えていくのです」

清掃における考えを、企業家は柔らかな声でこう説明した。「業界を変えた」といわれるサマンサジャパン株式会社の小野英輔会長である。経営哲学や教育、

人材育成などをテーマにした講演も度々依頼されている企業家だ。

## 経営の技術と経営の心

同社の歴史は、一九五七（昭和三十二年）に小野会長の父・祥亮氏が徳山市（現・周南市）で創業したことに始まる。一九六二（昭和三十七）年には、前身の建物保全株式会社を設立した。

小野会長は立命館大学で材料力学を学んだ後、大阪の企業に就職していた。父の会社を手伝うべく、徳山に戻ってきたのは二十七歳のときだ。

「長男の宿命であり、大学に行かせてくれた恩義もあります。ぼやかずに帰ってこようと思いましたが、世代の違う父とは、経営の勉強をすればするほど衝突しました。人をほめることができない父でしたが、今思うと、そのことが私を強くしてくれたと思います。子どもはやっばり、自分にとって一番いい親のもとに生まれるのです」

当時、清掃業は「終末の仕事」と思われることが多かった。入社して十年間は営業して仕事をとったら、自分で仕事をこなすという状況で、企業家として夢を持ちながらも、何をしたらいいかわからない日々が続いた。夢に対して具体的な戦略が描けなかったのである。

そんな小野会長の人生を変えたの

## profile

小野 英輔（おの・ひですけ）

1940年山口県徳山市（現・周南市）生まれ。1966年立命館大学卒業後、大阪の機械製造会社に就職。その後、父が社長を務める建物保全株式会社に入社。1988年に代表取締役社長に就任。1996年にサマンサジャパン株式会社に社名変更。2006年に代表取締役会長に就任。

文：城市 奈那 写真撮影：宮本 剛（山口県周南市在住）



「半歩先」を表現する場となるパフォーマンスコンテスト 写真提供:サマンサジャパン株式会社



顧客のみならず、社員や地域社会から愛される企業として、経済産業省の「平成24年度おもてなし経営企業選」に選出  
写真提供:サマンサジャパン株式会社



サマンサクラブの名物となっている朝礼 写真提供:サマンサジャパン株式会社

「人から必要とされ、感謝されることがみんなの原動力となっています。どうしてこんなにみんなが頑張ってくれるのか僕自身も分かりませんが、不思議な循環が生まれているのです。その根底にあるのは、やはり教育でしょうか」  
教育で一番大切なのは理念を伝えること、と小野会長は語る。  
「当社には経営理念と企業理念の二つがあります。経営理念は経営する目的ですが、『いい会社をつくりたい』というのは経営者の一人よがりです。それより

も働く人にとってどんなメリットがあるか。それを経営理念としています」  
サマンサジャパンの経営理念は、「縁あつて共に働く仲間となった従業員に『明るく豊かな人生』を与えること」である。その経営理念を実現するのが、「お客さまの繁栄と幸福を追求する」という企業理念である。それを誰かに実現させるのではなく、自らが実践するべきと考える小野会長は、この理念を伝えるために全国を回り、従業員に直接伝えていく。小野会長の話を涙を流しながら聞く従業員も多い。  
また、同社では、毎年十二月を親孝行月間と定め、全社員が親孝行を行い、その報告書を提出している。その中から選ばれた感動的な報告書は冊子になる。毎年続けることで、一人一人の変化が如実に表れてくると小野会長は言う。  
山口県では教育の充実を図るため、小・中・高等学校の教頭先生を一年間民間企業に派遣する、長期社会体験研修を実施している。同社は十七年続けて受け入れを行っているが、研修に来た教頭先生たちからは、「企業はこんなにも人間力を育む教育を行っているのか」と驚きの声があがるといふ。



本社外観

大してきた。

## ハイサービスを生むSQC

「魅せる清掃」といわれるサマンサジャパンの基本をなすのは、整理、整頓、清潔、清掃、しつけ、作法の6Sである。同社ではこの6Sを徹底して学ぶ。さらに、お客さまから感謝の手紙が送られてくるほどのハイサービスを生むのが、SQC（サマンサ流QC、サマンサ流品質管理）である。現場の最前線での「半歩先のサービス」を常に考え、継続的に実践する。毎年開催されるパフォーマンスコンテストでは、全国各地のスタッフが、お客さま、利用者の方々に喜んでもらえるサービスを、実際にシミュレーションしながら提案する。そのアイデアはすべて現場のスタッフによるものだ。

単だが、実現するのは難しい。そこで、小野会長は行動改革から始め、成功事例をつくることで、意識を変えていこうと考えた。そして生まれたのが、サマンサクラブである。  
**ヤングミセスが求める働き方**  
社長に就任したとき、現場社員の平均年齢は五十九・九歳であった。清掃業はシルバー産業とも呼ばれ、高齢者を雇用する意義ある会社ともいわれていた。しかし、現場で働く人たちは、最前線の「営業職」でもある。小野会長は、三十歳前後のヤングミセスを雇用できないかと思ひ、広島で、主婦をターゲットとしたマーケティング・コンサルティング事業を立ち上げたばかりの、株式会社ハー・ストリーイの日野佳恵子氏を訪ねた。  
二人は親子ほどの年の差があるが、「まず聞かれたのは『三十歳前後のヤングミセスが何を求めて働くか分かりますか』ということ。『分からない』と答えると、『分からない人には教えられない』と言われました」と小野会長はそのときのことを振り返る。  
考えを練る中で、日野氏が出した提案は女性の清掃スタッフ集団「サマンサクラブ」の結成であった。名前はテレビ番組「奥様は魔女」からとったもの。おしゃれなユニフォームの着用、化粧の仕方から

始まるマナー教育など、イメージをガラッと変えるアイデアが溢れていた。  
「やっぱり仕事を楽しむことが一番。どんなプラスアルファがあっても、仕事の中心に楽しさがなければ、人は働きません」  
サマンサクラブは、「テニスクラブと同じ発想」と小野会長が語るように、複数がそれぞれ都合の良い時間に働けるパートタイム制とした。管理面では終日働く社員を採用した方が楽であるが、勤務時間がフレキシブルな方が、ヤングミセスにとっては働きやすい。古い考えにとられないよう、スタッフの中で経験者は一人だけにして、あとはまったくの素人を雇った。  
当初は反対する人もいたが、業績を振り返ると、サマンサクラブの導入で利益が上がっていることは明らかだった。利益を上げられれば、従業員に還元できる。そうすることでさらに人が集まるといふ好循環が生まれはじめた。  
このサマンサクラブの導入で同社は飛躍し、一九九六（平成八）年には「サマンサジャパン」に社名を変更。現在は、周南市に本社を置き、福岡市に支社がある他、広島、山口、岡山、神戸、鈴鹿、三河、長野、神奈川営業所などがある。また、住宅リフォーム部門「サマンサリフォーム」、業務請負事業「サムタイムクラブ」を設けるなど、順調に業容を拡

済の浮き沈みの中でも、進化してきたサマンサジャパン。これからも、今の好循環を守りながら、常に進化していくことが大事だと小野会長は話す。  
「私が社長になったとき、父のやり方が延長線上では繁栄することも、みんなが豊かになることもできないと思い、思い切つて業態を変更しました。それは経営方法を変えることでもあります。わが社は十数年ごとに、何度か業態変更を行ってきましたが、次の業態変更に向けた、これからの十年はものすごく面白くなると思います」

従業員一人一人の人間力が、そう確信させるのであろう。会社の未来を見つめる小野会長は、誇らしい表情に満ち溢れていた。

# 「感動」のサービスで 顧客を創造する島根電工株式会社

《島根県松江市》

公共事業の減少を見越し、一般消費者向けのサービス「住まいのおたすけ隊」を立ち上げ、新たな市場を開拓した島根電工株式会社。その高成長の裏には、社員を大切に育む企業の姿勢があった。

## 公共工事から 一般家庭のサービスへ

「あなたの住まいを助けない」をキャッチフレーズにしたテレビコマーシャルで、地元で抜群の知名度を誇る島根電工業以来、電気設備や通信設備、給排水衛生設備や空調設備などを手掛けてきた設備工事会社である。

以前は、大型の公共工事が事業のほとんどを占めていたが、公共事業や民間の大型工場の減少をいち早く見越し、新たな顧客を創造すべく方針を転換。一九九七（平成九）年に一般消費者のニーズに応えるサービス「住まいのおたすけ隊」を立ち上げた。

「住まいのおたすけ隊」は、照明器具の取り替えやコンセントの増設、水道の蛇口の交換、エアコンや換気扇の掃除な

ど、日々の生活における困り事を解決するサービスで、一件千円の小口工事から受け付ける。作業服に身を包んだ島根電工の社員が出演する親しみやすいテレビコマーシャルで徐々に認知され、依頼が増えるようになっていった。件数、売り上げは年々増加し、現在では総売り上げの約半数を小口工事が占める。

このサービスの特徴の一つが、たった一度の訪問で完了する見積もり・施工システムである。現場調査したその場で見積書から請求書まで作成できる携帯情報処理端末を独自開発した。これにより、これまで一つの工事を終えるのに要した日数や段取りを大幅に短縮し、「すぐにやってくれる」という利用者側の期待に応えている。

## 期待を超える感動を届ける

「住まいのおたすけ隊」の開始後、同

と荒木社長は語る。

## 一番大切なのは 社員とその家族

そうした企業風土や文化の形成を下支えしているのが、同社が常に力を入れていく社員教育である。「企業の最大の地域貢献は雇用」と荒木社長が語るように、同社では毎年三十名を継続的に採用。新人研修は三年間で合計十回、独自のプログラムを持った宿泊研修が詳細に設定されている。その後も、二十代、三十代、四十代、五十代と年次やレベルに応じた各部門別の研修が実施される。

ビッグブラザー（BB）、ビッグシスター（BS）制度も同社の教育の特色の一つで、入社後、新入社員にはマンツーマンで若手の先輩が付き、初めて社会人になる若者をサポートしている。

また、社員が幸せな生活を送り、楽しく働けるような環境づくりも重視している。育児休業制度、子どもの看護休暇制度などのほか、誕生日休暇制度（社員本人の誕生日が有休）、子どもの出生時に父親が取得できる休暇制度、半日有給休暇制度、介護休暇制度などユニ

社は業界でもトップクラスの高収益企業になった。その成長を支えているのは、感性豊かな社員による質の高いサービスだろう。経済産業省の「平成二十五年度おもてなし経営企業選」に選出されており、社員の意欲と能力を最大限に引き出し、利用者に対

し高付加価値のサービスを提供する企業として全国から注目されている。

「将来、電気工事がなくても電気がつき、水道工事がなくても水が使える時代になったらどうなるかとよく社員に尋ねます。そういう時代はそう遠くありません。われわれは快適な環境をお客さまに提供する会社なので、サービス業としての意識を持つことが必要です」と荒木恭司代表取締役社長は、その意識改革について振り返る。



クなものも多い。こうした制度の充実が「一番大切なのは社員とその家族、二番目に協力会社の社員とその家族、三番目にお客さま、四番目に地域、五番目に株主」と語る荒木社長らの考えによるものだ。豊かな人生観を持った社員だからこそ、お客さまを喜ばせることができると思う。

## 「住まいのおたすけ隊」を フランチャイズ化

二〇一三（平成二十五）年からは「住

まいのおたすけ隊」の仕組みやノウハウをまとめ、フランチャイズ展開を開始した。現在、二十三社が加盟している。研修を受け、全国の加盟事業所が同社を訪れる際、松江を観光できるプログラムも組み込まれており、地域貢献の一つとなっている。

昨年末には、第一回電気工事技能競技全国大会で、二十三歳の若手社員が優勝した。サービスだけでなく、技術力の高さも証明された結果だ。

自社社員を大切に育み、充実して働ける環境をつくることで、お客さまや地域に貢献していく。価格競争に陥りがちな現代において、小口工事で高収益化を実現した同社の姿勢や企業風土は、何物にも替え難い価値を持っている。



現場研修 写真提供:島根電工株式会社



本社外観 写真提供:島根電工株式会社



ビッグブラザー（BB）制度の懇親会にて、新入社員と先輩社員が握手  
写真提供:島根電工株式会社



荒木恭司代表取締役社長





子どもたちに好評の「雪どけ水ロケット」※

た宇宙イベントはもはや過疎化が進む北広島町の町おこしにまで成長してきている。イベントには町内の子どもはもちろんだが、県外から参加者が訪れる。ネットで告知を見たとき、関東からわざわざ参加する人もいる。そうした県外在住者との交流で北広島町は活気を取り戻しつつあるのだ。

また、この町に古くから伝わる伝統食を宇宙食にする事業もスタートした。「宇宙食の条件は、長期保存ができること、宇宙への搬送コストを抑えるため軽いこと、宇宙飛行士も人間ですから食べておいしいもの、あるいは飽きがこないものが考えられますが、この条件をすべて満たしているのが昔ながらの保存食です」と井筒さんは語る。そこで、乾燥いもを星形に切り抜いた「星イモ」、型抜きを外側で余った部分を集めた「星クズ」といった独自の宇宙食を開発している。しゃれたネーミングやパッケージ



「ギャラクティックハーベスト」ではハデ干しを体験※



地域の人からイノシシの解体を学ぶ※



乾燥いもの「星イモ」と「星クズ」※



宇宙飛行士を目指す地域の中学生と※

藤沢 享乃(ふじさわゆきの)  
鹿児島県生まれ。ライター、よつば編集広告事務所代表。大学を卒業後、出版社を経て広島県でフリーライターに。現在は、ライター仲間と設立したよつば編集広告事務所を拠点に、地域に根差した記事を執筆している。

にこだわった商品は完成間近である。この保存食の例のように過疎の町、北広島町には宇宙ビジネスに直結できるシーズ(開発の種)がたくさんあると井筒さんは言う。

今、井筒さんが注目しているのは地域に住む高齢者の「生活力」だ。「地域のお年寄りにはあらゆる分野での生きる知恵があり実現するスキルを持っている。例えば朝起きたらすぐに無線で知人と連絡を取り合い、猟銃を持つて狩りをしたり(狩りは命をいただくという神聖なこと)、チェーンソーで大木を切り倒してまきを作ったりすることなどは朝飯前です。自然を上手に利用して生きる術を心得ているのです。そんな皆さんに弟子入りして、現在、自分の生活力レベルを少しでも上げようと奮闘中です」と笑う。こうしたお年寄りのスキルこそ宇宙飛行士の生命力強化訓練に最適と井筒さ

んは確信しており、今夏からは宇宙飛行士を目指す子どもたちを集めた「ギャラクティックチャレンジ」(子ども向けの宇宙飛行士養成塾)を発足したい考えだ。

さらに、自らが「宇宙博士タレント」になって、宇宙に関する知識をもっと分かりやすく発信し、関連イベントを展開するような活動を行っていききたいという。そうすることで、科学者の新しい仕事の領域が見えてきそうだと考えている。そして今、地域からの発信にこだわる井筒さんは、書籍の出版も準備しているところだ。

宇宙を楽しむ「なるほど！ネタ」を豊富に持つ井筒さんの講演会は人気が高いという。井筒さんの話を聞いていると、はるか遠くの宇宙のことがとても身近に感じられる。科学を地域から発信する新しい役回りを、きつこの地で確立していくだろう。

この名酒はこの一品

7

《島根県浜田市》

環日本海純米吟醸のど黒

ノドグロ



日本海酒造株式会社

創業 1888(明治21)年  
島根県浜田市三隅町湊浦80  
http://www.kan-nihonkai.com  
年間生産量 1,000石(180kg/10万升)



「環日本海」ブランドでさまざまな酒を展開

日本海に注ぐ三隅川の河口に程近い場所に建つ日本海酒造は、「うま味があつてキレイがいい」を酒造りのモットーとする。「酒は料理をおいしく味わわせ、会話を弾ませる名脇役であつてほしい」と藤田真路取締役が語るように、酒が次の料理へと箸を進めることを重視する。日本海酒造は六十年以上に島根県で初めて但馬杜氏を採用した。県内には濃醇でコクのある酒が多いが、浜田のさまざまな魚料理に合うのは、味わいがあつて後切れのいい酒だと感じていたからだ。

地元の素材を大切にし、水は中国山地の伏流水、酒造米は市内の弥栄町や三隅町で契約栽培する五百万石などを使用する。「酒はコミュニケーションツール。香りがどうかなど難しく考えずに気軽に飲んで、おいしいと言ってもらうのが一番うれしい」と、藤田氏も小原広明副杜氏も声をそろえる。

今回紹介するのは、日本海酒造の銘柄「環日本海」の純米吟醸「のど黒」。この名酒と一緒に味わいた

いのは、もちろん日本海の高級魚・ノドグロである。

ノドグロは、白身だが脂がよく乗っているのが特徴だ。刺身のほか、地元では煮付けにして味わうことが多い。この魚に合う酒を要望する声は以前からあり、ノドグロを浜田の特産品として売り出そうという周囲の熱意に共感し、二〇一二(平成二十四)年に発売した。

後切れのいい「のど黒」は辛口の中に適度なうま味が調和している。精米歩合は六十%、アルコール度数は十四度で、飲み口は軽い。香りは控えめで料理の邪魔をせず、口を含むと魚の脂が洗い流され、箸が進みそうだ。

「のど黒」と言い切る分りやすさが反響を呼び、土産品としての需要もあつて、今では日本海酒造の主力商品の一つに成長した。地元だけでなく東京や大阪でも、ラベルの絵を見て魚に合うだろうと買い求める人が多いという。藤田氏は「いろいろな魚で試して、食べ合わせを楽しんでほしい」と話す。

# 萩



江戸時代の町割りは今も広く残ることから、古地図を持って歩けるといわれる萩のまち。今年のNHK大河ドラマの舞台になり活気づく萩のまちを、古地図とともにたどる。

## 三角州に築かれた城下町

萩は日本海に注ぐ橋本川と松本川が形成する三角州上と、その周辺の沖積低地に位置する。古代から人が住んでいた地域で、十四世紀には大内氏の支配下に置かれた。十六世紀中頃からは大内氏を討った毛利氏の領地となり、この付近を治めた津和野城主吉見氏の居館や寺社が建ちはじめ、周辺部では町衆も定住した。

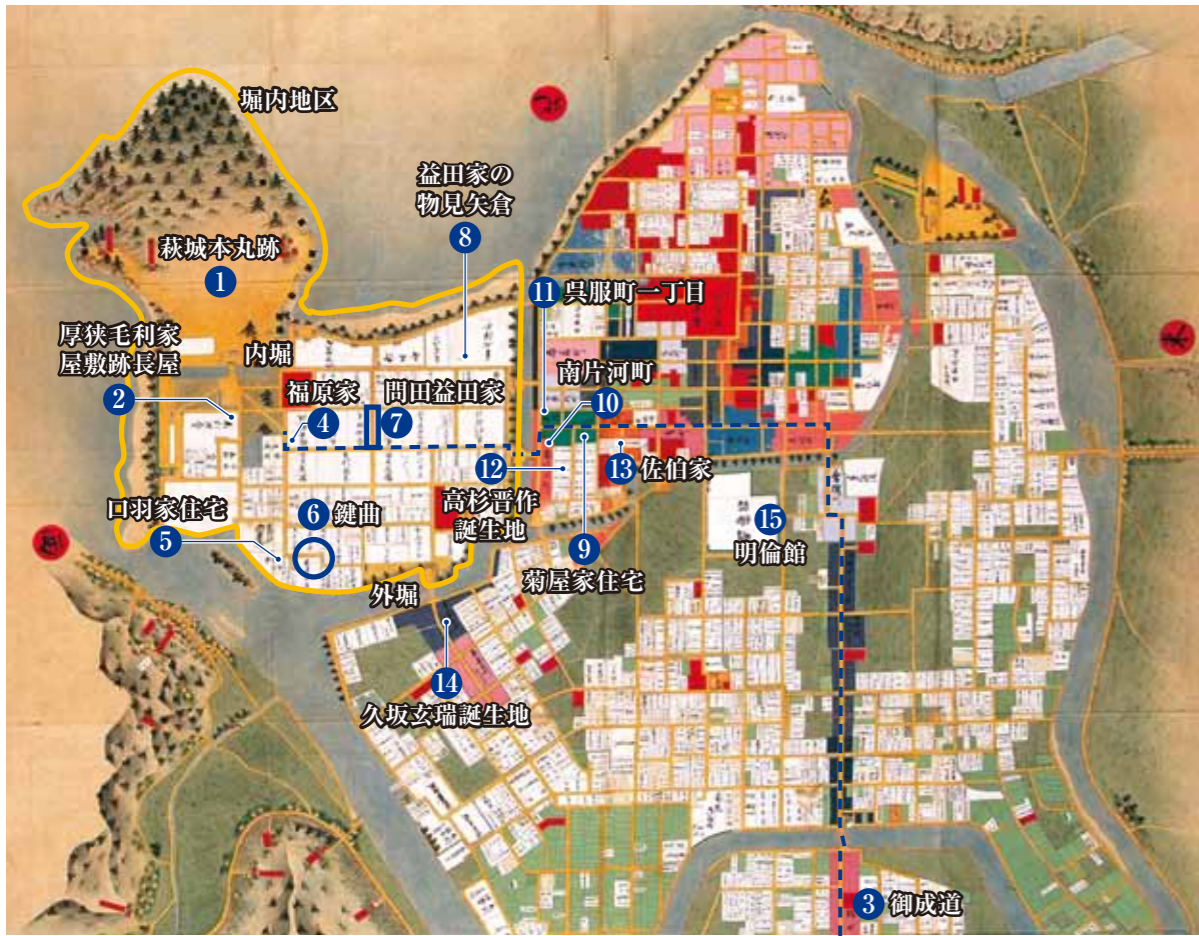
本格的な城下町は毛利氏によって形成された。一六〇〇(慶長五)年、関ヶ原の戦いで西軍の総大将だった毛利輝元は、それまでの領地八カ国百二十三万石を召上げられ、周防・長門の二カ

## 堀内の景観も守った夏みかん

国三十六万石へと減封された。毛利家では防府の桑山、山口の高嶺(鴻ノ峰)、萩の指月山の三方所を築城候補地として幕府に伺いを立て、その意向を酌み、萩が築城地に決まった。一六〇四(慶長九)年、築城工事は指月山東南麓の湿地帯の埋め立てから始まった。輝元はその年の十一月、居館もまだ完成していない萩城に入り、自ら工事を督励した。城が完成したのはそれから四年後の一六〇八(慶長十三)年六月だ。築城工事と並行し、城下町づくりも進められた。

人、**12**高杉晋作の誕生地だ。この古地図では高杉家より東側の筋に**18**佐伯家の名が見えるが、別の地図ではこの家の北側に書かれている和田家が見え

ない。和田家は木戸孝允の旧宅である。近隣の桂家の養子となって桂小五郎と名乗ったが、江戸に出るまでの約二十年間をここで過ごした。



萩御城下絵図(慶応元年) 山口県文書館蔵

**1**萩城本丸跡は現在、指月公園として整備されている。二の丸跡には六代藩主宗広が東園と名付けた回遊式庭園や、鉄砲を打つための穴を開けた銃眼土塀が残る。

二の丸の外、南門のそばには**2**厚狭毛利家屋敷跡長屋が残る。厚狭毛利家は八千三百七十一石の重臣で、現在長屋だけが残っている。三の丸は、永代家老や上級武士の屋敷が並んでいた地区である。東へ進むと、武家屋敷の名残をとどめる場所に出る。**3**御成道の西端に見える**4**福原家には武家屋敷にしては派手な造りの豪華な門が残されている。寄組士の**5**口羽家住宅は堀内地区で唯一、主屋がそのまま残っている武家屋敷だ。そこから東に向かうと、**6**鍵曲と呼ばれる場所がある。街路を鍵の字形に曲げて敵の侵入を防ぐ造りで、城下町に特有のものである。他にも、**7**間田益田家の長い土塀や、堀内へ出入りする人を見張った**8**益田家の物見矢倉などが残る。ただし、ほとんどの屋敷は原形をとどめていない。十三代藩主敬親によって藩政の中心地が山口へと移転したことで、幕末、維新の動乱を経て萩には屋敷を維持できない家が相次いだ。そこで収入を得るために屋敷跡での夏

みかん栽培が奨励された。そのため、町割りや土塀はそのまま残ったのである。堀内地区は一九七六(昭和五十一)年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

## 維新の志士が駆けつけた道

堀内地区の東へ外堀を渡ると、下級武士や町人が居住していたエリアがある。御成道の両側には町人の居住地が並び、その北側もおおむね町人の居住地であった。その中でもひととき大きなのが豪商の**9**菊屋家住宅だ。十七世紀後半に建てられ、全国的にみても古に属する大型の町屋である。

城下の町数は時代によって変動するが、町年寄を置いたのは**10**南片河町、**11**呉服町一丁目など三十町とされる。菊屋家の西側の筋は菊屋横丁と呼ばれる、白壁が美しい通りである。この筋沿いにある高杉家は維新の志士の一

堀内の南側の平安古町は、永代家老の下屋敷や中級武士の屋敷のあったエリアで、**14**久坂玄瑞誕生地などもここに残る。また城下町エリアの南側には、毛利家家臣の子息の教育を行った藩校**15**明倫館があった。萩を訪れた坂

本龍馬が剣術の試合をしたという剣槍術場の有備館や、観徳門などが現存する。現在、敷地内には他に明倫小学校、萩商工高校が建ち、大河ドラマ放映に合わせて「文と萩物語 花燃ゆ大河ドラマ館」も建てられている。今年五月に、世界文化遺産登録が勧告された「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」の構成資産の一つである吉田松陰の松下村塾があった松本川の東側は、このころの地図では道と家の存在だけが書かれ、町名などは見えない。

明倫館跡の二校のほか、堀内地区には指月中学校と萩高校がある。日々藩士たちが駆け、学び、命を懸けて国について考えたこの地で、その息吹を感じながら学ぶ子どもたちにもまた、志が受け継がれていくのだろう。



旧福原家萩屋敷門と夏みかん



萩城址



高杉晋作誕生地



菊屋横丁



鍵曲

# 湯原温泉

《岡山県真庭市》

岡山三大河川の一つ、旭川の上流にある湯原温泉は、中国地域最大のダムに面した稀有な景観を持つ温泉である。共同露天風呂「砂湯」を住民が毎週掃除するなど、歴史ある温泉文化を地域が一体となつて大切に守っている。



旭川の川床から湧く温泉を岩で囲った「砂湯」

## 「西の横綱」に選ばれた 共同露天風呂「砂湯」

旭川を横目に、緑溢れる山道を蛇行しながら北上すると、中国地域最大の湯原ダムが見えてくる。そのダムを背に温泉につかれるのが、湯原温泉を代表する名所「砂湯」である。旭川の川床から湧く温泉を岩で囲った露天風呂で、砂を噴きながら温泉が湧いていることから、「砂噴き湯」「砂湯」と呼ばれるようになった。砂湯は、住民が毎週水曜日に清掃を行い、無料で開放されている。そのことが高く評価され、旅行作家の会代表の野口冬人氏が一九八〇（昭和五十五）年に「湯けむりの里」（暁教育図書発行）で発表した露天風呂番付において、大分の由布院や岐阜の下呂温泉などを抑えて、西の横綱に選ばれた。砂湯は湯原温泉の古代からの風呂の様子を唯一残すものとして市の文化財として指定されている。

入浴は混浴のため、利用者は昔から伝わる法度により定められた入浴マナーに留意しなければならない。最近

では女性用湯浴み着を企業と共同開発し、旅館や湯原観光情報センターなどで貸し出すなど、安心して入浴できるように配慮されている。

泉質はアルカリ性で、入浴時には肌につるつるとした感触が残ることから、衣をまとったような柔らかささと表現される。無色透明、無味無臭の「単純温泉」で、源泉は約五十度、低張性アルカリ高温泉で刺激が弱い。そのため、高齢者でも安心して入浴ができ、病後回復期や外傷後の療養などにもいいとされている。神経痛、筋肉痛、関節痛などさまざまな症状の軽減に効果が認められている。

## 牛馬市からの帰り にぎわった「湯原の大病」

湯原地域には、湯原温泉のほか、足湯泉、真賀温泉、下湯原温泉、郷緑温泉など計五つの温泉があり、総称して「湯原温泉郷」と呼ばれる。その歴史は古く、湯原温泉の砂湯はたたら製鉄が盛んだった時代に、過酷な労働に従事していた大勢の人が温泉を見つけ、仕事の疲れ

## 「奇祭」はんざき祭り

温泉とともに、湯原の顔となっているのが「はんざき」である。「はんざき」とは国の特別天然記念物のオオサンショウウオのことで、旭川の上流域、湯原・ウウオの生息地として指定されている。湯原には「はんざき大明神」という伝説が残り、それに由来した「はんざき祭り」が毎年八月八日に開催されている。「はんざき大明神」とは、人や牛馬を飲みこむ巨大なはんざきを三井彦四郎という若者が退治したところ、彦四郎の一家は死に絶えてしまったことから、村人たちははんざき大明神の祠を建てて祭るようになったというもの。はんざき祭りでは神事や祭礼のあと、大はんざきを模した山車を子どもたちが引きながら、揃いの浴衣と花笠にたすきがけの踊り手とともに温泉街を練り歩く。岡山



作図：小学館クリエイティブ



「6.26」露天風呂の日でのお湯取りの儀



8月8日のはんざき祭り



トライアスロン大会



旭川

を癒し回復するために入浴したのが始まりといわれている。また、足湯泉には、宇喜多秀家の母おふくが湯治で三週間滞在したところ病が治ったことから、諸国の人々が訪れたという逸話も残る。

「湯原の大病」といわれるほど、まちは大変なにぎわいをみせた。昔からこの地域は水害が多く、洪水によつて湯原温泉は何度も流された。六十年前に湯原ダムが完成し、水害は大幅に減つたが、雨量が多いとダムの放流が必要となる時がある。砂湯は旭川のすぐそばにあるため、放流時に流されないよう東屋などは簡易式となっており、放流前に東屋や脱衣所がクレーンで吊り上げられる光景はこの温泉独特といえよう。

夏之夜には、「はんざき」も川沿いに姿を現すという湯原温泉。歴史のつながりが感じられる、不思議な魅力のある温泉である。

絹本着色普賢菩薩像

《鳥取県智頭町》

普賢菩薩とは、大乘仏教における崇拜対象とされる菩薩の一尊である。文殊菩薩とともに釈迦如来の脇に従う菩薩で、法華経を唱えて修行する者がいれば、六本の牙を持った白象に乗って現れ、守護すると説かれている。

嘉祥年間（八四八～五二）に空海の実弟である真雅大僧都が開いたのが始まりと伝わる、鳥取県智頭町の豊乗寺が有する普賢菩薩像は、全国屈指の名品といわれている。

本図では、象の背に置かれた五重蓮華座に結跏趺坐して合掌しながら行者の前に近づく普賢菩薩の姿が華やかかつ繊細に描かれている。肉身はすべて朱線で描かれ、円光・法衣には金銀箔を糸のように切つて貼り付ける截金の技法を、台座には色の濃淡をつけて霞のような色の美しい調和を表現する暈染の技法を用いるなど装飾技法に秀でている。平安時代後期の作と推定される。現在は東京国立博物館に寄託。



絹本着色普賢菩薩像（豊乗寺蔵）

画像提供：東京国立博物館 Image：TNM Image Archives